

野辺地尚義 外交に一役

天皇の代替わりで新時代への期待が高まる中、新皇后となる雅子さまの縁戚にあたる花巻市大迫町亀ヶ森出身の野辺地尚義（1825～1909年）が注目されている。雅子さまの曾祖父に当たる海軍大将山屋他人の伯父で、教育者として活躍後、国内外の要人の社交場となった東京・芝の「紅葉館」館主を務めた異色の存在。知られざる明治民間外交の陰の立役者ともされる。尚義の生涯を描いた本を出版した玄孫の野辺地えりざさん（71）＝東京都世田谷区＝は「岩手県人の文化的レベルの高さを示す人物で、多くの人に知ってもらいたい」と話す。

新皇后雅子さま縁戚、花巻出身



親戚と写真に収まる晩年の野辺地尚義（中央）。右隣は山屋他人（藤井茂著「山屋他人」より）

尚義は南部藩の豪農の家生まれ、32歳で脱藩し、江戸に出て長州藩・藩医の大村益次郎の私塾・鳩居堂で蘭学を学んだ。門弟だった久坂玄瑞や勝海舟らと親交を深めたとされ、幕末には幕府側についた南部藩に

明治の社交場を経営

要なこともあり、人脈もあって文化的素養や国際感覚の豊かな尚義に、経営責任者である「館主」として白羽の矢が立ったという。1881（明治14）年に開館した紅葉館は、尚義が経営の一切を任せられ、多くの政治家や実業家が利用し

再考を促そうと奔走したという逸話もある。長崎で英学も学び、明治維新後は、京都府官吏として府立語学校を創設するほか、全国に先駆けて公立女子学校を開設し校長になるなど教育者として活躍した。英語が堪能な人材が必

生涯描く本 玄孫が出版

たほか福沢諭吉が演説をしたことでも有名に。外国人の間では「メープル・クラブ」との名で親しまれた。歴史的には同時期83（同16）年に開館した鹿鳴館が有名だが、7年ほどで閉鎖されたことから、紅葉館が大きな役割を果たした。尚義を頼って岩手県人の集まりも度々開かれ、お山の山屋他人のほか原敬、米内光政、田中館愛橘、鹿島精一らそうそうたる顔ぶれが出席していたという。尚義は1909（同42）年に85歳で亡くなるまで館主を務めた。その後、同館は料亭としての趣を強くしていくが、東京大空襲で焼



野辺地えりざさんの著書「紅葉館館主 野辺地尚義の生涯」。表紙は歌川広重三代による「東京名所図会 芝紅葉館」

失し、跡地には現在、東京タワーが建っている。尚義が祖母の祖父に当たるえりざさんは、30年ほど前に偶然読んだ歴史年表で名前を見つけたことから興味を持ち、図書館などで資料を調べていった。1年半ほど前からは本県や東京、京都など、ゆかりの地を訪ねて本格的な取材も行い、一冊の本にまとめた。えりざさんは「多くの偉人を生んだ明治期だが、岩手でも尚義の存在は知られていない。岩手県人は芸術・文化で高いレベルにある」といつも感じており、そのことを示す人物の「一人だ」と語る。新皇后となる雅子さまにも思いを寄せ「学問好きなどころや謙虚な性格が尚義のDNAを受け継いでいると感じる。これを機に多くの人に知ってもらいたい」と期待する。

「紅葉館館主 野辺地尚義の生涯」は盛岡市内の書店などで販売。桜出版刊、1512円。